

事業名：ネイチャーチャレンジ

団体名：千葉県立水郷小見川青少年自然の家

指定管理者：小見川フィールズパートナーズ

1 概要

【期 日】令和7年8月13日（水）～16日（土）3泊4日

【対 象】小学5年生～中学3年生 24名 ※40名が応募し、抽選で24名を決定

【会 場】千葉県立水郷小見川青少年自然の家（香取市小見川 5249-1）

【参加者】

	小学5年生	小学6年生	中学1年生	中学2年生	計
男子	6名	5名	1名	0名	12名
女子	8名	3名	0	1名	12名
計	14名	8名	1名	1名	24名

2 ねらい・内容・方法

○人との関わり方の重要性を学ぶとともに、協調性を培う。

○自らチャレンジすることや積極的に行動することなど、前向きに生きる心を育てる。



	午前	午後	夜
1日目	1.オープニング 2.アイスブレイク	3.仲間づくりのゲーム 4.夕食づくり	5.振り返り
2日目	6.朝食づくり 7.いかだづくり① 8.いかだの試乗（黒部川） 9.昼食づくり	10.いかだづくり② 11.いかだチャレンジ（黒部川） 12.夕食づくり	13.ナイトハイクの説明 14.仮眠 15.起床→ナイトハイク準備→スタート（2:00）
3日目	16.ナイトハイクゴール（9:00） 17.仮眠	18.昼食づくり 19.ファイナルチャレンジ①	20.ファイナルチャレンジ② 21.たき火タイム 22.振り返り
4日目	23.片付け 24.振り返り 25.解散式		



冒険教育の手法によるグループ活動

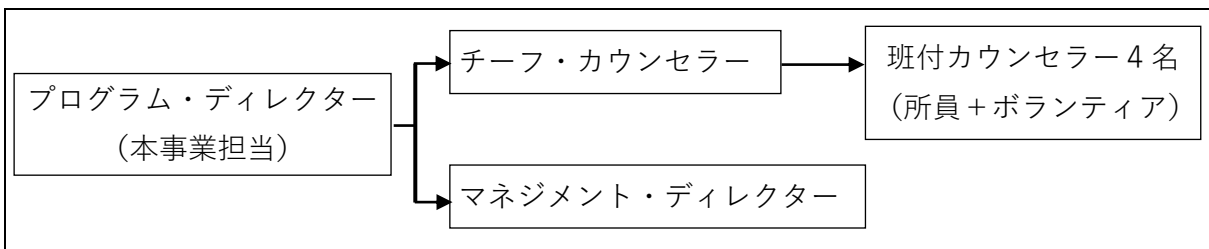
3 企画意図

「新しい仲間」と「ありがとうお互いと言える関係（一人ではできないことを楽しむ）」をつくることをメインテーマにして企画・運営を行った。

【背景】

- ・子ども達は、自分の考えや気持ちを言葉や態度で発信することはできるが、相手の考えや気持ちを受け止めたり、受け止めたことを言葉や態度で表したりすることは苦手な傾向が見られる。
- ・また、発信する際は独りよがりであったり本音を隠したりする傾向が、受け取る際は自分の枠組み本位で解釈する傾向が見られる。
- ・そこで、「みんながいるからできた」「助けてもらう←ありがとう」「助けてもらう⇔助ける」「互いに高め合える、成長し合える」という状況を生み出すプログラムを企画し、それに適した指導方法とした。

4 運営体制



5 事業の様子

【1日目】○グループ活動への意識付け ○規範づくり ○ルールを知る

○「オープニング」では、テーマ「みんなと一緒にいるからこそ、『できた』『ありがとう』を大切にする」ことを伝え、本キャンプの意味を理解させ、活動への意欲付けを行った。

○「安全指導」（心の安全、熱中症等）の後、参加者同士及び参加者とスタッフ間の緊張を緩和し、ゆるやかな関係を作ることを目的とした「アイスブレイクゲーム」を全体で行い、次いで、課題を解決する「イニチアチブゲーム」を班に分かれて行った。活動を通して、徐々に、互いに意見を交わす姿が見られた。

○イニチアチブゲームの延長とも言える（協力してやり遂げる）「夕食づくり」を行った後、一日を振り返り、感想や気づいたことを話し合った。



【2日目】○意見の衝突→納得の解決を（意見がまとまらないことへのフラストレーション）

○「いかだづくり①」では、ロープの結び方を全員に教えた。その後は、子ども同士が関わり合うようにするため、できない子どもにスタッフが教えるのではなく、できない子どもができる子どもに訊き、できる子どもができない子どもに教えるようにした。

○「いかだづくり②」では、早い人が遅い人を助ける姿が見られた。子ども達の会話では「教えてあげる」「ありがとう」という言葉を多く聞くことができた。

○組み立てたいかだを黒部川で浮べ試乗し、その後、手直しをして本番を迎えた。皆で苦労・工夫して作ったいかだを漕ぎ、喜び合う姿が見られた。



【3日目】○チャレンジの日 「慣れ」による良い影響・悪い影響

○1時に起床し準備を整え、2時に「ナイトハイク」をスタート、自然の家から10kmほど先にある「橘ふれあい公園」を目指しグループでまとまって歩いた。本活動は、昼間の熱中症を避ける意味もあるが、夜中に20kmを歩くという非日常的で身体的な負荷が高い体験をやり遂げることで大きな達成感が得られると考えた。ナイトハイクでも、しっかりと役割分担を行い、誰かに求められなくても、自ら考えや思いを伝える姿が見られた。

○9時までに全員がゴールし完歩を喜びあった。



○最後に、ここまでグループで活動し高まった力を発揮する場面として、ファイナルチャレンジとなる「イニチアチブゲーム」（エレクトリックフェンス）を行った。これまでの活動のような身体的負荷ではなくて、課題を達成するために自分の内面や仲間と向き合い葛藤するという精神的に高い負荷をかけることで、今までとは異なる協同の在り方を考えることをねらった。

○「振り返り」で「友達」と「仲間」について問いかけたところ、他者に対して自分ができ

ることや自分が他者から何をしてもらいたいかを言葉で表すことができる子どももいた。



【4日目】〇感謝の気持ちを忘れない

〇4日間使用した場所と道具を片付け、掃除を行った。

〇その後、4日間を個人で振り返り、班で分かちあった後、スタッフから子どもたちにメッセージを伝えエンディングとした。

〇解散式では、保護者も参観し、4日間をスライドで振り返った。

6 参加者の変容と声（事業の効果）

（1）測定方法

①設問：「ネイチャーチャレンジに参加したことによる『心の成長』度合いを教えてください」

②回答：参加前【1・2・3・4・5・6・7・8・9・10】 } 個人ごとに前後の数値を測定
参加後【1・2・3・4・5・6・7・8・9・10】 } し比較・分析

（2）測定結果：参加後の選択肢－参加前の選択肢＝絶対値

絶対値	1	2	3	4	5	6	7	8	9
人数	0名	2名	6名	4名	1名	4名	2名	4名	1名

（3）参加者の主な声

- ①学校では体験できないことができた。最初は、知らない人との活動はあまり体験をしたことがなかったので緊張したが、時間の経過とともに友達ができ最後は安心してできた（小5女子）。
- ②疲れたし大変だったけれど、みんなのことを知り仲良くなれて楽しかったから（小5女子）。
- ③様々なものにチャレンジでき、いい経験になった（小5男子）。
- ④たくさん大変なこともあったけれど、やりがいがあり満足！（小6女子）。
- ⑦自分がとても成長したように感じた（小6男子）。
- ⑧疲れたり嫌になったりしこともあったけれど、みんなで協力しあったり助け合ったりすごく楽しかった。だから、やりきった（中2女子）。

7 事業の成果と課題

（1）成果 子ども同士が「話し合って決める活動」「協力したり励まし合ったりしてやり遂げる活動」「活動を振り返る時間」を設定したことで、アンケートや「心の成長度合い」の結果をみると、本事業のねらいを達成することができたと言えよう。

（2）課題 プログラムの精度を高めるとともに、保護者から「SNSに写真を掲載しないでほしい」「子どもの様子を実際に見たい」という要望が事業期間中にあったので、担当者が運営に集中できるよう参加者募集の段階での広報の内容を検討することが課題である。